

私の体験記

福岡市南区 安部 武之

私は昭和13年、当時の満州（現在の中国東北地方）大連に生まれた。アカシヤ並木の景観や市内のあかぬけた様子が幼少の目に写ったままで、50年経った今も最近のことのよう鮮明に浮かんでくる。

終戦に近くなつたころは父の事業の関係で大連から離れ、奉天（現・瀋陽）までの中程にある蓋平という小さな町に住んでいた。戦時中とはいえ日本人も中国人も平穏な暮らしをしているように見えた。ただ一つそれを感じさせるのは日本軍が駐屯していたことであつた。町の中には小高い丘があり、林檎畑が広がり、たわわに実つた林檎の木の下で遊んでいたことを覚えている。

昭和20年になり、頻繁に米軍のB29の大編隊が銀翼を翻して通過するのが見え、大人やのんびりとしていた兵隊たちが緊張感に包まれていくのが感じられた。4月になり、私も小学校に入学することになった。まだ平穏であつたが、父に突然召集令状が来て慌ただしく戦地へ向かつた。残された4歳下の弟と母と私の3人は不安はあつたものの、「直ぐ帰ってくるから」の父の言葉に、父の親や兄弟がいる大連に帰ることもせず事業を継続していた。

8月15日の終戦と同時に、突然ソ連軍の侵攻が始まつた。日本人の間にはソ連兵の野蛮な行動、中国人の報復などの流言飛語は広がり、動揺も極限状態であつた。この小さな町にも沢山のソ連兵が押し寄せた。赤ら顔、がっしりとした体格に自動小銃を抱え、驚いたことに両腕には日本人から奪つたであろう腕時計がびっしりとはめられていた。女性は危険だとのことで丸坊主になり、男性の服装で息を潜めていた。町のあちこちで銃の乾いた発射音が響き、ジープや装甲車が轟音をたてて行きかう。子供たちは見張り役となつて外でソ連兵の動静を伺うが、近づいても特に危険はなかつた。

日本人は引き揚げることになつたが、いろいろな情報が錯綜していて、私たち母子には判断の術もなく、つきあいのあつた朝鮮の人の勧めで朝鮮経由で引き揚げることにした。あとで考えるとわざわざ危険を冒してのものにはほかならず、そのまま大連に行けば何の苦労もなく内地（日本）へ直接引き揚げられたのに、情報がなかつたとはいえ無謀な逃避行となつた。

朝鮮人は無条件で帰国できるということもあり、朝鮮人の服装をして汽車に乗り込んだ。途中何度も検問があり、私達親子は聾啞者の親子ということにし、付き添ってくれた朝鮮人の青年が対応をしてくれたが、弟は事態が理解できず何度も日本語で話しそうになり、周りの朝鮮の人達に露見し密告されるのではないかと冷や汗をかかされた。いよいよ汽車も満州と北朝鮮の国境の川、歌にも歌われ朝鮮半島でも一番長い流れを持つ鴨緑江の手前で終点となり、徒歩で国境を越えれば北朝鮮である。厳しい検問も聞くことも話すこともできない者を決め込み何とか通過、長い橋を渡る清々しさは何ともいえぬ心地よさで、母や青年からもそれが伝わって

きたものであった。

北朝鮮の青年の故郷は平壤に近い山あいの村で、父親はその村の長をつとめかなり裕福な家のようにであった。危険な旅の疲れと安堵感から母は体調を崩し、しばらくその家に匿ってくれることになった。秋も深まり、北と南を分断した38度線の状況は一段と厳しくなるようで、一刻も早く越えなければならなくなり、急遽私たち母子は、再び青年の付き添いで国境の付近の町に着いた。そこには他に何組かの日本人の姿があり、ガイドを雇い、日暮れと同時に出発することになった。国境の山道を足音も立てず声も出さず黙々と歩く。途中警備のソ連兵の談笑する声やたき火の火が見える度に這うようにして前進する。時には銃の発砲の音が聞こえる、だれかが見つかったのではないかと心配するゆとりもない。自分たちが一刻も早く国境を越えなければならぬと焦るばかりだが、私はどもかく、弟は歩くことに苦痛を訴えはじめ、母や青年の背中に。進む速度は落ちるばかり、ガイドも気が気ではないらしく遅れている人を叱咤する。私もこんなに長く歩くのはもちろん初めてで、途中で座り込みたくなるが、出発する前に、「歩けなくなったお年寄りや子供たちがあちこちの国境の山道で放置されていた」ことを聞かされていたため、気力を振り絞って歩き続けた。

空が幾分明るくなった頃、周囲にざわめきが起こった。38度線を、10里の道を越えたのだ。周りを見ると多くの日本人の姿が見えた。各々の道と同じ地点を目指し一晩歩き続けた人達が集団になったのだ。南朝鮮の検問では食料や衣類が用意されていて、アメリカ軍の兵隊たちが脱出を歓声を上げて迎えてくれた。子供の目、いや大人にも一瞬ソ連兵とアメリカ兵の区別がつかず戸惑ったものだ。

満州からこの国境まで、自分の危険も顧みず私たち母子を守ってくれた青年との別れが待っていた。母の感謝の涙は止めどなく流れ、私も子供心に感謝の気持ちを精一杯その手を握り締めることで表わしていた。いつかまた会えるであろうことを願ったが、その後の朝鮮戦争で南北は今日まで分断されたままで、その機会も巡ってこなかった。本当に残念でならない。

ソウルでは、引き揚げてくる日本人の世話をしてくれる人達が、引き揚げまでの宿舎や生活にも親身になってお世話をいただいた。

冬も目前に迫った11月になり、ようやく引き揚げの順番が来た。釜山まで汽車で行き、引き揚げ船に乗り込んだ。終戦から3ヶ月が過ぎていた。着のみ着のまま、革靴はすっかりすりきれていた。母も随分とやつれていた。粉雪が舞う博多港についた。日本はこんなに寒いのだろうか、と驚いた。寒さには馴れているはずなのに、満州の寒さとは違っているように思えた。でもやっと日本に帰れたのだという実感はあったが、なかなか感激が湧いてこなかった。逆にこれから先の不安を募らせていた。

母の故郷は岡山県で、ここに落ち着くことになったが、戦後の食料難は極限に達しており、私達が突然引き揚げてきて喰ぶちが一挙に増えたことで一層困窮に拍車をかけたようだ。しかし、いやな顔一つせず、母の両親を初め兄弟たちが、私たちを支えてくれた。父の生死もわからず、母は迷惑をかけまいと必死に働いていた。やがて、祖母や兄弟たちが、佐賀市に引き揚

げていることがわかり、昭和23年にソ連に抑留されていた父が復員することの通知ももたらされた。

佐賀市にようやく一家がそろって間借り生活が始まった。しかし、何も持ち帰ることができなかったため、早速その日から困窮生活が始まった。

戦前戦後を通じて日本人のほとんどがそうであったように、戦争による犠牲と戦後の混乱に疲弊しきった中で、何とか立ち直るチャンスを求めて各々が努力を行ったものだが、私たち一家にはなかなか訪れてはくれなかった。福岡に出てきて家族総力を上げて必死に働き、ようやくこれからという時に父が58歳の短命で他界、母は平成5年、翌6年には弟を52歳の若さで亡くしてしまった。

戦後50年必死で努力した結果が、私一人を残して呆気なく過ぎて行こうとしている。世のはかなさを嘆く前に過ぎ去った過去を振り返り、これまで与えられた貴重な体験を風化させることなく、お世話になった方々に感謝の気持ちを持ち続けなければならないのが私の使命であると言ひ聞かせるこの頃である。